The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アイデンティティを引き受ける : バトラーとクィア/アイデンティティ・ポリティックス
Author(s)	藤高, 和輝
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 23-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アイデンティティを引き受ける
――バトラーとクィア／アイデンティティ・ポリティックス

藤高　和輝

はじめに――アカデミズムとその「他者」

クィア・スタディーズはアクティヴィズムとひじょうに密接な関係にある学問分野である。「クィア理論 Queer theory」という用語を最初に導入したテレサ・ド・ローレティスは、次のような問題意識からその語を導入した。「すなわち私たちのあいだに存在する『様々な差異』は、それらがどんなものであるにせよ、『レズビアンとゲイ』という政治的に正しい言語を使う言説によって、表現されているというよりはむしろ、その文脈の大部分において排除されているからだ。言い換えれば、そこでは差異は示唆されてはいるが、『と』という接続詞によって、いずれ自明なこととなり、あるいは隠蔽さえされてしまうということだ」(ローレティス , 1996, p. 69)。このように、ローレティスが「クィア理論」を導入した背景には、レズビアンとゲイの差異や人種的差異を考察する必要があった。彼女は、「ゲイ男性とレズビアンがお互いの差異、またはお互いの性差を語りあえるなら連帯を作ることは可能」だが、「その連帯がいつも前提にされ、つくりあげようとはされてこなかった」ことに警鐘を鳴らすために「クィア理論」という用語を導入したのである (ローレティス , 1998, p. 72)。したがって、彼女が「クィア」という言葉に賭けたものは「連帯をする前に、それぞれお互いが何であり、いやそれぞれ複数のアイデンティティとは何であるかについて考えること」(ローレティス , 1998, p. 72) だったのである。

このように、クィア理論はアクティヴィズムとの関わりのなかで生まれ、発展してきた知であるといえる。言い方を換えれば、クィア理論にはアカデミズムとアクティヴィズムの緊張関係がつねに孕まれているのである。「クィア理論」というひじょうに難解で高度な理論展開のなかでとくに興味を引くのは、「日常的」で「生活世界」に根差した問いが不意に現れることである。初期クィア理論の古典と位置づけられるジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』が幼少期に自身の身に起こった〈ジェンダー・トラブル〉の記述から始まっているように。のちにバトラー自身が振り返っているように、『ジェンダー・

トラブル』において問われていたのは「生存」の問題だった。それは「ジェンダー規範から外れ、その規範の混乱において生きている人々が、それでも自分たち自身を、生存可能な生を生きている者としてだけでなく、ある種の承認に値する者としても理解できるような世界を想像する試みだった」(Butler, 2004, p. 207) のである。そして、それはまた、アクティヴィズムとの密接な関係性のなかで生まれたのである。したがって、もしクィア理論を単なる高踏な文化的遊戯とみなすならば、それはそこで問われているもっとも重要な問題を看過することになるだろう。

本論では、バトラーのテクストを読みながら、しかし、そこにアカデミズムにとっての「他者」を見出すようなテクスト実践を行いたい。実際、これはまたバトラー自身のテクスト実践でもある。バトラーは『ジェンダーをほどく』(2004) の最終章を「哲学の「他者」は語ることができるか」と題している（このタイトルはスピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』をもじったものである)。そこでバトラーは、「哲学」という制度の外の、「哲学」にとっての「他者」を、「哲学」という制度においていかに語ることができるかという問題を探求している。それは「他者」の経験を「哲学」に回収してしまう植民地主義的な語りではない。事実、バトラーは「他者」との交流において「哲学」の意味そのものがずれていくことを見出している (Butler, 2004, p. 241)。これは言い換えれば、そのようなテクスト実践が生み出すズレにおいて、私たちは「哲学」にとっての「他者」の声をかすかにではあれ聞くことができるという可能性を示唆しているだろう。「臨床哲学」が社会の「現場」にコミットメントし、アカデミズムの「他者」との対話を通して思考するあり方を指すのであれば、それはバトラーの試みと無縁ではなく、むしろどこかで必ず共振するものではないだろうか。

本稿では、クィア理論、とりわけバトラーのテクストをこのような視点から読み直したい。そのような視点から本稿で探求したいのは、アイデンティティ・ポリティックスの経験である。バトラーの「クィア理論」はしばしば、アイデンティティ概念を批判した「脱構築」の理論として読まれる傾向があり、その解釈はまたバトラーがアイデンティティ・ポリティックスを「否定」したという政治的結論を導く傾向にあるが、本稿ではこのようなクィアとアイデンティティ・ポリティックスを対立的に捉えるのではない読解可能性を示唆したい。

第一節では、クィア理論やバトラーの思想を反・アイデンティティ・ポリティックスとして紹介する傾向を、クィア理論を日本の文脈で学んだ著者自身の「世代」ないし個人的

な経緯から説明する。第二節では、このようなクィア・ポリティックスとアイデンティティ・ポリティックスを二元論的に理解する言説、アイデンティティ・ポリティックスを「乗り越える」ことを提唱する言説を批判的に検討する。以上の考察の後、第三節では改めてバトラーの『ジェンダー・トラブル』に立ち返り、アイデンティティ・ポリティックスの経験が彼女にとってどのようなものであったかを考察し、その上で、第四節ではバトラーが描くクィア・ポリティックスの内実をみていくことにしたい。「おわりに」では、私自身がこれらの問題提起をどのように引き受けるべきかを考察することで本稿を閉じたい。

1　アイデンティティを「乗り越える」？

クィア理論と系譜学的批判は密接に結びついており、そのため、「世代 generations」はそれ自体重要なトピックである (Young and Weiner, 2011, p. 226)。ここでまず、私自身がクィア・スタディーズを学んだ世代的な背景を説明することを導入にしたい（この説明はもちろん、私自身の主観的な経験に即してなされるので客観的なものではない)。

私が大学に入学したのが 2005 年であり、クィア・スタディーズを学んだのもその頃である。当時、バトラーやイヴ・コゾフスキー・セジウィックの著作はいくつか日本語に訳されており、また、レズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズが日本に導入され始めた 90 年代に比べると、それらは少なくとも認知度においては一定の市民権を獲得した時代にあったといえる。しかしながら、ある程度認知が広がるということは、その思想なり理論なりが文脈から外れ一人歩きをし始めることでもあるだろう。とくにバトラーに関して言えば、2000 年代においてバトラー自身の思想的展開が一見フェミニズムやクィア理論から部分的に離れ、より一般的、普遍的な議論を展開しているようにみえたため、なおさらバトラーの理論は「主体理論」として、また「主体の脱構築」の理論として受容されていったように思われる。

ここで、ひじょうに個人的な経験に触れておきたい。それはある意味で、私の「世代」においてクィア理論がどのように受け止められたかを示す一例であるように思えるからである。ひとつは、大学のゼミでバトラーやスピヴァクのテクストを読んだときのことである。いまでも私に強烈な違和感を引き起こしたものして忘れがたい言葉なのだが、それはある出席者が議論の最後に総括した「要するに、アイデンティティはないということだ」という言葉である。もうひとつは、アクティヴィズムの場である人が――おそらく、私と

同じように大学でクィア・スタディーズを学んでいる人だったかもしれない――が語った「アイデンティティ・ポリティックスは古い」という言葉である。これらの言説は、私には歴史に対してあまりに不誠実な態度であるように思えた。しかし、理論的な観点でいえば、私はこれらの言説に反論することができないことにとても戸惑ったことを憶えている。というのは、例えば、たしかにバトラーは「脱・アイデンティティの政治」を唱えているように一見思えたからである。

ここでアカデミズムの言説に戻ろう。というのは、このような言説を生みだした一端はアカデミズムの言説にあるように思われるし、私自身が違和感を抱えながら、しかし反論できなかったのはまさしくそのためだったからである。ここでまず取り上げたいのが、上野千鶴子が編集した『脱・アイデンティティ』(2005) である。そこで上野は、アイデンティティはそれが「他者」によって可能になる動的なものである以上語義矛盾であり、また近年では多くの人々が「アイデンティティの統合を欠いても逸脱的な存在になることなく社会生活を送っている」(上野 , 2005, p. 35) ことから、アイデンティティはとうに「有効期限の切れた概念ではないか」(上野 , 2005, p. 5) と論じている。そしてそのうえで、このようなアイデンティティの「呪縛」から逃れる「脱・アイデンティティの政治」を唱えている。同じテクストのなかで、伊野真一は「アイデンティティの単純でわかりやすい物語」(伊野 , 2005, p. 71) を批判し、アイデンティティ・ポリティックスの「限界」を指摘している。伊野もまた、クィアにその「限界」を乗り越える視点を探っており、そこではアイデンティティ・ポリティックスとの「対立」が強調されている。

もうひとつは、90 年代における浅田彰の「段階説」である。私自身はこの説を「脱・アイデンティティ」の言説に対して意識的に批判の目を向けるようになってから知ったのだが、それでもやはり、浅田の「段階説」はこの種の言説の「系譜」として議論すべきものである。そこで浅田はセクシュアル・マイノリティの運動を「二段階」にわけている。それは「まずアイデンティティの確立の段階があり、しかしその次にそれを脱構築する段階がある」(浅田 , 1998, p. 142) というものであり、前者をアイデンティティ・ポリティックス、後者をクィア・ポリティックスとして位置づけている。浅田は、これは現実的な「段階論」ではなく、理念的な水準にあるものであることを断りながら、日本の文脈におけるアイデンティティ・ポリティックスの「必要性」を「擁護」し、それが十分な成果を挙げた後に「アイデンティティの脱構築」が要求されるべきだとしている。

それぞれの言説は、アイデンティティ・ポリティックスを「乗り越える」ものとしてクィ

アの実践や理論を設定している点で共通している。先に言及した「アイデンティティは原理的にはない」とか「アイデンティティ・ポリティックスは古い」といったような語りは、このような言説が帰結するものをある意味で率直に表わしているように思われる（もちろん、上で言及した論者が正確にこのように言っているわけではないが）。これはできれば誤りであってほしいのだが、私の「世代」はこのような「理解」に意図するとせざるとを問わず依拠しているように思われる。

たしかに、クィアはアイデンティティ・ポリティックスと批判的な関係を切り結んだ実践であり理論であり、その批判的な反省から生じたといえる。しかしながら、クィアを「脱・アイデンティティ」や「アイデンティティの脱構築」として強調する見方は、アイデンティティ・ポリティックスとの「対立」を強く描くあまり、また、それを「乗り越える」べき経験とみなすあまり、その関係は「断絶」として表象され、アイデンティティ・ポリティックスが過度に単純化される危険性がある。そして、この二元論的な見方は結果として、クィア・ポリティックスのもっとも重要な側面さえ見失い、忘却しかねない。次節では、このようなナラティヴとは異なるパースペクティヴを探るために、近年のアイデンティティ・ポリティックスの再考を促す議論を参照し、そのうえで先の言説を批判的に検討したい。

2　アイデンティティ・ポリティックスを再考する

ジェイムス・クリフォードは論文「アイデンティティ・ポリティックスを真剣に考察する」のなかで、アイデンティティ・ポリティックスをめぐる今日の状況を次のように描いている。

> 「アイデンティティ・ポリティックス」は今日、あらゆる方面から攻撃を受けている。政治的な右翼はただ文明の（つまりナショナルな）伝統に対する争いの種になるような非難をそこにみるだけであり、左翼の合唱団の方は共通の夢の黄昏、つまり抵抗を累積する政治が断片化していることを嘆いている。他方、ポスト構造主義者の傾向をもつ知識人は、部族や民族、ジェンダー、人種、性的なもの、といった留め具にもとづいた運動に直面すると、反・本質主義の引き金を素早く引くのである。いまや疑いもなく、狭く定義され、攻撃的に維持されたグループ・アイデンティティは、より広い、より包摂的な連帯の深刻な障害物でありうるのである。(Clifford, 2000, p. 94- 95)

日本の文脈でも、このような状況はそれほど大差がないであろう。アイデンティティ・ポリティックスは「本質主義」の烙印を押され、それに対する弁解を余儀なくされているように思われる（「戦略的本質主義」というタームがこの事情をよく表わしているだろう）。クリフォードはこのような傾向に対して、次のように批判を加えている。「いかに個別的な排他主義や分離主義の例における私たちの反感を正当化しようとも、もし、その批判がそのようなものとしてアイデンティティ・ポリティックスを一般的に位置づけることに固執するなら、あるいは、その批判がそのような主張を『乗り越える』ことを肯定するよう導くのなら、その批判は無効になるかもしれない」(Clifford, 2000, p. 95)。というのは、そのような一般的な見方は、アイデンティティ・ポリティックスが孕む「複雑な不安定性、両義的なポテンシャル、歴史的な必然／必要性 (necessity) を見失う」(Clifford, 2000, p. 95) 恐れがあるからである。

このようなアイデンティティ・ポリティックスをめぐる趨勢は、今日のクィアをめぐる言説の状況にも当てはまる。クィア理論家のジュディス（ジャック）・ハルバースタムは次のように述べている。「多くの若いゲイとレズビアンは彼ら自身を『ポスト・ジェンダー』の世界に属する者と考えており、『ラベル付け』は彼らにとって、自分たちが無限の多様性の多元的な世界に進むために愉快に脱ぎ捨てた抑圧の記号になっている」(Halberstam, 2005, p. 19)。メインストリームにおけるこのような、いわば「ラベル嫌悪」とでも呼べる状況は、非歴史的な思考と結びついてしまう。ハルバースタム自身、次のように述べている。「たとえ同じアイデンティティ・カテゴリーが〔……〕先立つ世代のアクティヴィストの仕事を表象しているときでさえ、彼らは『ラベル』を好まない」(Halberstam, 2005, p. 19) のである。クィアにおけるこのようなあり方を、ハルバースタムは「侵犯的な例外主義」と呼んで批判している (Halberstam, 2005, p. 19)。クィアはホモセクシュアルやレズビアン／ゲイの運動に系譜をもち、そこには差異ばかりでなく共通性があるにもかかわらず（また、過去の「古い」運動に「いま・ここ」の運動よりもずっとラディカルな可能性を孕んだものもあるにもかかわらず）、それらがアイデンティティという「ラベル」を有しているというただそれだけのためにその系譜関係は断ち切られてしまうのである。

ハルバースタムはこのような趨勢、クィアな主体を「ラベル」から自由な主体とみなす傾向を、ネオリベラリズムが要請するフレキシブルな主体と一致していることを指摘して

いる（これは上野の言説からも明らかである）[1]。だが、ここでより着目したいのが、クィアとアイデンティティ・ポリティックスの関係性である。このような言説が問題含みなものであるのは、なによりもそれがアイデンティティ・ポリティックスの歴史的経験を「忘却」している点にあるように思われる。ここで立ち返り参照を促したいのが、すでにクィア理論の初期の時代に、クィアの言説が抱えもつ問題点を指摘したレオ・ベルサーニの『ホモズ』(1995) である。

ベルサーニは『ホモズ』のなかで、クィアの言説が「抹消」の言説になってしまう点を指摘している。「ゲイとレズビアンは、自分がどのようにしてゲイとして、レズビアンとして構築されてきたかを自覚するほど洗練されたとき、その瞬間に姿を消してしまったのである。特定のゲイのアイデンティティを疑うこと（とホモセクシュアリティの病因論的な調査に対する相関的な不信）は、規範のヘゲモニックな体制への抵抗に必要不可欠な根拠そのものを除去する、という奇妙だが予想された結果を招いてしまった。私たちは自分たちを構築した認識的、政治的体制を脱自然化するプロセスのなかで私たち自身を消去してしまったのである」(Bersani, 1995, p. 4)。このように、たしかにアイデンティティを「疑う」必要はあるものの、そのような試みは結果として、ゲイやレズビアンの存在を「抹消」しようとするヘテロ・ノーマティヴな社会の要請をある意味で実現してしまうという逆説的な可能性があるのである (Bersani, 1995, p. 5)。それに対して、ベルサーニはアイデンティティを性急に「乗り越える」よりも、それを「たとえ一時的にではあれ受け入れる」(Bersani, 1995, p. 5) べきであると主張し、さらに彼はゲイのアイデンティティや欲望をラディカルに引き受けることを通して、そこに自己同一性をむしろ破壊してしまうような「ホモ‐ネス」を見出そうとした（したがって、彼がクィアを批判したからといって「本質主義」「アイデンティティ主義」であるとみなすことは誤りである）。

近年では、リー・エーデルマンが『ノー・フューチャー』（2004）でベルサーニの議論を引き継ぎ、なおかつ逆説的にもそれをクィアネスとして捉え直している[2]。ここでは彼の議論を詳細に検討するのではなく、本稿と関わりのある重要な問題提起に限定して考察を進めたい。彼はクィアないしクィアネスをネガティヴィティとして捉えることを提唱している。彼によれば、クィアは「象徴的なもの」（そして彼にとっては、それは「社会的なもの」や「政治的なもの」とほぼ等値なのだが）に対する「絶えざるノー」(Edelman, 2004, p. 5) であり、この「否定」は単に政治における対立ではなく、政治そのものへの対立であるとみなされる (Edelman, 2004, p. 17)。それは絶えず反復される構造的な否定

である以上、彼は「クィアには未来はない」と理論化する。この理論の是非は措いておくとして[3]、彼はこのような定式化が以下の二つの意味をもつと指摘している。（1）まず、それはクィアを「アイデンティティの実体化」を斥けるものであることを意味する。彼によれば、クィアは社会や政治の構造に対する「絶えざるノー」である以上、その位置やアイデンティティは絶えず揺れ動くのであり、ピンで留めることはできない (Edelman, 2004, p. 4)。（2）第二に、そしてこちらの点が本稿で強調したいものであるが、クィアが「絶えざるノー」である以上、「未来」への「実現」に向けた単線的で進歩的な時間／歴史観ではクィアを表象することはできない、ということである (Edelman, 2004, p. 4)。むしろ、彼によれば、そのような時間観はヘテロ・ノーマティヴィティが前提にする未来志向的で再生産的な時間観である[4]。

ここで、浅田の「段階説」に戻ろう。浅田はセクシュアル・マイノリティの運動の「未来」を「アイデンティティの脱構築」として描いた。ここで私たちは、この言説が語る美しい「未来」にではなく、それが現在もってしまう「言説 - 効果」にまず着目しよう。浅田はアイデンティティ・ポリティックスの「必要性」を認識しており、それを「擁護」すべきであると述べている。しかしながら、彼のアイデンティティ・ポリティックスの「必要性」に関するナラティヴはつねに、「いまは」、「まずは」、「まだ」、「この段階では」といった、いわば時間的な制限を設けるものである。それは、いつか来る「未来」において「乗り越えられる」べきものであるとみなされているのである。つまり、浅田の言説は「あなたたちの活動や経験は、アイデンティティ・ポリティックスである限り、未来において乗り越えられるべきものである」ということを勧告する言説として機能しているのである（しかし、そのとき、彼はいったいどこから語っているのだろうか？）。それはまさしく、ベルサーニが指摘していた「抹消」の言説ではないだろうか。

浅田や上野の言説はまた、理論的、理念的な水準においても問題がある。それは運動や政治の「未来」を決定する言説でもある。フーコーが『生の歴史Ｉ』で、関係のあるところには権力があり、したがって、権力の外部はないと主張し、バトラーが『ジェンダー・トラブル』でフーコーのエルキュリーヌ・バルバンの分析を批判し、権力のあるところにはアイデンティティがあり、その外部はないとした「反・解放主義」を展開したのに比べると、浅田や上野の言説は「解放主義的な」言説に陥ってしまっているように思われる。また「未来」を（「アイデンティティの脱構築」として）描いてしまうことで、それはエーデルマンが指摘したように歴史を「未来」に向かう単線的で進歩的なものとして表象して

しまう（事実、浅田はホモセクシュアルの時代／レズビアン・ゲイの時代／クィアの時代といったリニアーな歴史観を示している）。この点で、バトラーが抵抗や運動の未来を「予測不可能」であるとして、法や権力の「外部」（つまり未来）を理論や理念の水準においてさえ描かなかったことは、きわめて倫理的な要請であったように思われる。

このように、クィアをアイデンティティ・ポリティックスを「乗り越える」ものとして描くことは、たとえ理念的な水準にあったとしても、重大な理論的結果を招いてしまう。それはアイデンティティ・ポリティックスの歴史的経験を「抹消」し、歴史を未来に向かう単線的（ストレート）で進歩的（ストレート）な歴史観、時間観として表象し、そこに私たちを閉じ込めてしまうのである。これは「理論」が「現実」の「未来」を決定するひじょうに乱暴な議論になりうるのである。したがって、私たちはいま一度、クィアとアイデンティティ・ポリティックスとの関係を再考する必要があるだろう。ここで私たちは以上の観点から、バトラーの『ジェンダー・トラブル』に立ち返り、読み直したい。

3　バトラーとアイデンティティ・ポリティックス

『ジェンダー・トラブル』の副題「フェミニズムとアイデンティティの転覆 Feminism and the Subversion of Identity」は誤解を招きやすい表現であるように思われる。とくに日本語にすると、それは「フェミニズム……の転覆」を意味するものとして受け止められる可能性がある（原題では、「転覆」は「アイデンティティ」にのみかかる言葉である）。『ジェンダー・トラブル』は「クィア理論」の「古典」と認識されているが、それは遡及的に捉え直した解釈であって、当時のバトラー自身が「クィア理論」を展開しようと考えていたわけではない。実際、バトラーは「クィア理論」という言葉を本書執筆時には知らなかったのである[5]。バトラーが述べているように、ここで彼女が取り組んだのはあくまでフェミニズムにおいてであり、そのクリティークはあくまでフェミニズムのためになされたのである[6]。

また、「アイデンティティの転覆」という言葉も誤解を招きやすいだろう。バトラーはたしかに、「女」というアイデンティティにたいして系譜学的な批判を行った。しかし、それは「女」という「アイデンティティ」を否定し、捨て去ることを意図したわけではない。それでは、バトラーの批判はどのようなものであったか、そこで問われていたものは何であったのかを、ここで改めて考察したい。

バトラーは 1999 年に付された『ジェンダー・トラブル』の序文で、次のように述べている。「一九八九年当時の最大の関心事は、フェミニズム文学批評に異性愛的な思い込みが広く流布していることだった。わたしは、ジェンダーの境界と妥当性を仮定して、ジェンダーの意味を男らしさと女らしさという一般に認められた概念に制限するような見方に、反駁しようとした」(Butler, 1999=2000, p. viii=66)。当時のバトラーが問題にしたのは、したがって、「女」と言われているものが実際には「異性愛者の女」であったということであり、それが自明視されていたということなのである。この意味で、その試みは「はじめに」で言及したローレティスの試みと共通している。それは「女」という言葉で隠された差異を指摘し、そのような「隠蔽」によるのではない連帯の可能性を模索したものとして考えることができるだろう。事実、バトラーは次のように問うている。「そもそも連帯とは、その内部の矛盾を認め、それはそのままにしながら政治行動をとるはずのものではないか。またおそらく対話による理解が引き受けねばならない事柄のひとつは、相違や亀裂や分裂や断片化を、しばしば苦痛を伴う民主化のプロセスのひとつとして受け入れることではないか」(Butler, 1990=1999, p. 20=42)。

したがって、バトラーが『ジェンダー・トラブル』で行った「フェミニズムの系譜学」において問題視されたのは、アイデンティティをカテゴリーとして前提にすることで「他者」を我有化する植民地主義的な語りの様式であったといえる。そのような語りは「具体的な種々の『女たち』が構築される際の文化的、社会的、政治的な交錯の多様性を、結果的に無視してしまうことになる」(Butler, 1990=1999, p. 19=41) のである。それに対して、バトラーはアイデンティティを「意味づけのプロセス」として捉えることを主張している。ここで、以下の有名な一節を改めて取り上げよう。

> 人は女に生れない、女になるというボーヴォワールの主張に何か正しいものがあるとすれば、その次に出てくる考えは、女というものがそもそも進行中の言葉であり、なったり、作られたりするものであって、始まったとか終わったというのは適切な表現ではないということである。現在進行中の言説実践として、それは介入や意味づけ直しに向かって開かれているものである。(Butler, 1990=1999, p. 45=72)

ここでバトラーはボーヴォワールの「人は女に生れない、女になる」を引きながら[7]、しかし、「女」は「はじまり」や「おわり」があるようなものではなく、それ自体「意味

づけのプロセス」にある言葉だとしている。言い換えれば、このプロセスに「はじまり」や「おわり」もないのであり、繰り返すと、アイデンティティを越えた「外部」は存在しないのである。「フェミニズムがしなければならない批判的作業は、構築されたアイデンティティの外側にフェミニズムの視点を打ち立てることではない」(Butler, 1990=1999, p. 201=258 強調引用者) のだ。そして、バトラーはこの言葉に続けて次のように述べている。「そんなことをすれば、フェミニズム自身の文化的位置を否定し、ひいては包括的な主体として――フェミニズムが批判すべき帝国主義的な戦略を配備する位置として――邁進する認識論のモデルを構築してしまうことになる」(Butler, 1990=1999, p. 201=258) と。

アイデンティティを「意味づけのプロセス」とみなすことはまた、「アイデンティティを引き受けること」が必ずしも自己同一的な主体を招来するのでも、権力への「服従」に還元されるのでもない可能性を示唆している。それは、そのアイデンティティが抱える矛盾に直面することでもあるのである。例えば、バトラーは以下のように述べている。

> 肌の色やセクシュアリティや民族や階級や身体能力についての述部を作り上げようとするフェミニズムのアイデンティティ理論は、そのリストの最後を、いつも困ったように『エトセトラ』という語で締めくくる。修飾語をこのように次から次へと追加することによって、これらの位置はある状況にある主体を説明しようとするが、つねにそれは完全なものにはならない。(Butler, 1990=1999, p. 196=252)

このように、アイデンティティはその内部に「他者」ないし「無限のエトセトラ」(Butler, 1990=1999, p. 196=252) を抱え込まざるをえず、したがって、その「説明」の「失敗」に直面せざるをえない。この失敗や矛盾――すなわち、ジェンダー・トラブルの経験――こそ、バトラーによれば、「フェミニズムの政治の理論化に出発点を与えてくれる」(Butler, 1990=1999, p. 196=252) ものなのである。というのは、それはアイデンティティが前提にされるべきカテゴリーではなく、それが排除した「他者」に向かって「再意味化」に開かれている「意味づけのプロセス」にあることを示唆しているからである。したがって、「肌の色やセクシュアリティや民族や階級や身体能力」といった「女たち」の差異は、「女」という「主語」に対する派生的な「述部」として理解されるべきではない。それらの差異は、そこで用いられている「女」の意味そのものを問うているのであり、それによって「そのカテゴリーをさまざまな意味が競合する永遠に使用可能な場として機能させることを可

能にする」(Butler, 1990=1999, p. 21=42) のである。

したがって、バトラーが求めるフェミニズムの政治とは、「女」というアイデンティティを無批判に前提にすることではなく、またそのアイデンティティの外から政治を俯瞰するような帝国主義的・植民地主義的な語りの様式でもない。それはアイデンティティの内部からそれを「他者」に開いていくような実践なのであり、そこではアイデンティティとそれが抱えもつ矛盾を引き受けることが要請されているのである。

4　バトラーとクィア・ポリティックス

それでは、バトラーはクィア・ポリティックスをどのように描いているのだろうか。それがアイデンティティの「乗り越え」ではないとしたら、クィア・ポリティックスとはいったい何なのであろうか。そのときヒントになるのが、『問題なのは身体だ』の最終章 “Critically Queer” における次の一節である。

> もし主体の系譜学的批判が現代の言説上の手段によって形成される構成的、排他的な権力関係に対する問いかけであるならば、それに従って、クィア主体についての批判はクィア・ポリティックスの民主化の継続に欠かせないものであるだろう。アイデンティティ用語が使われるべきであり、「アウトであること」が肯定されるべきであるのと同様に、これらの概念自体が生産する排他的作用は批判されなければならない。〔……〕この意味で、クィア主体の系譜学的批判がクィア・ポリティックスの中心になるのは、それがアクティヴィズムのなかの自己批判的領域を構成している限りにおいて〔……〕である。(Butler, 1993, p. 172- 173)

「批判的にクィアする critically queer」[8] とはしたがって、アイデンティティの「外部」を探求するものではない。上で述べられているように、「アイデンティティ用語は使われるべきであり、『アウトであること』は肯定されるべき」である。しかし、それと同時に、アイデンティティが孕む「排他的作用」を批判的に注視する必要があるのである。「批判的にクィアする」とは、アイデンティティに外在的ではなくあくまで内在的な実践なのであり、アイデンティティが孕む問題、矛盾、逆説、痛み、緊張、両義性において思考することなのである。

ホモセクシュアルがもともと病理学の用語であったにもかかわらず、それを政治的な用語に「逆転」させたように、クィアはもともと侮蔑語であったものを異性愛中心主義や性別二元論への抵抗として「逆転」させた運動である。これが示唆しているのは、「アイデンティティを引き受けること」が必ずしも自己同一的な主体を招来するわけではないという可能性であり、それが必ずしも権力への「服従」に還元されるわけではないという可能性である。「クィア＝脱・アイデンティティ」という認識が問題なのは、このような「引き受け」の複雑な過程を「抹消」してしまう恐れがあるからである。クィアという侮蔑的な言葉を自己に引き受けることは「痛み」を伴う経験であり、また、それはアイデンティティの問題や不安定性、矛盾、逆説を経験することである。

クリフォードが述べているように、「アイデンティティの維持に決定的なプロセス」とは「文化的な要素をつなぎ、はずし、記憶し、忘れ、集め、排除する」両義的なものであり、まさしく「このような文化的プロセスや政治の居心地の悪い (uncomfortable) 場所」に私たちはアイデンティティ・ポリティックスを位置づけることができるだろう (Clifford, 2000, p. 97)。クリフォードはまた、このような場所において「私たちは歴史的な『否定的能力』を育むことができる」と主張し、それは「他者の歴史的な経験に私たち自身が部分的にしかアクセスできないことを自覚する」能力であると述べている (Clifford, 2000, p. 97)。

私たちがバトラーの「批判的にクィアする」に見出すことができるのは、このような「歴史的な『否定的能力』」である。バトラーが強調しているのは、いわばクィアをクィアするような自己批判的な運動である。クィアとて、アイデンティティが孕む「排他作用」から自由ではない。それはつねに、「私たち」という名の下に「他者」の経験を領有してしまう可能性と紙一重なのである。アイデンティティ・ポリティックスの「隘路」や「矛盾」を経験したからこそ、バトラーはそれを自覚した政治のあり方を模索しているのであり、それはまさしくアイデンティティ・ポリティックスの両義的な経験から育まれたものなのだ。したがって、クィアをアイデンティティ・ポリティックスの「乗り越え」や「断絶」として表象することは、その核心をなす問題意識を見失うことになるだろう。バトラーがアイデンティティ・ポリティックスの経験から学んだことは、冨山一郎の言葉を借りれば、「私たち」が「困難」であるということであり、「私たち」とは誰かを絶えず批判的に問うことなのだ (9)。この意味で、クィア・ポリティックスとは、自己のアイデンティティをその矛盾をも含めて批判的に引き受ける営みではないだろうか。アイデンティティは「乗

り越えられる」べきであるのではなく、批判的に「引き受けられる」べきなのである。

おわりに――アイデンティティを批判的に引き受ける

最後に、バトラーが『自分自身を説明すること』(2005) で探求している倫理を以上の観点から読み直し、「男」であり「異性愛者」である「私」がバトラーの思想をいかに読むべきか、そこから何を学ぶべきかを考察したい。

私たちがみてきたように、「アイデンティティを引き受けること」は必ずしも自己同一的な主体であることに安らうことではなかった。それはまた、自己がどのような社会的な条件によって可能になっているか、自己がどんな他者を排除することで成り立っているかを反省する契機を与えるものでもあるのである。バトラーが『自分自身を説明すること』で追求しているのは、まさしくこのような倫理である。

「自分自身を説明すること giving an account of oneself」はその自己が社会的に形成されたものである以上、同時に「社会批評」でもある (Butler, 2005=2008, p. 8=16)。それはまた、自己がどのように社会的に形成されたかを説明することを通して、「自分自身に責任を与える giving an account of oneself」行為でもある。自己のアイデンティティは決して「自己」に完結していない。自己のアイデンティティはつねに「他者」との関係において、また「他者」を排除することを通して可能になる。そうである以上、「自分自身を説明すること」はその過程で「自己」が排除してきた「他者」の存在に出会うことでもあるだろう。「そこで人は、いわば知の限界にいるのだが、また、承認を与えてほしい、また承認を受けたいと要求されてもいる。つまり人は、呼びかけられるべくそこにいる別の誰か、その人の呼びかけが受け止められるべく存在するような別の誰かに直面しているのである」(Butler, 2005=2008, p. 22=40)(10)。

しかし、その「説明」はつねに完全なものにはならない。アイデンティティの「意味づけ」のプロセスには終わりがないのだから、この「説明」の作業もまた終わることはない。つまり、このことは、自己の内部の「他者」、自己がそれを排除することで成り立っている「他者」を、「私」が完全には知ることができないこと、それを我有化することはできないことを示唆しているのである。この意味で、「自分自身を説明すること」は同時に「自己」の「限界」に気づく試みでもあるだろう。したがって、それはクリフォードのいう「歴史的な『否定的能力』」――すなわち「他者の歴史的な経験に私たち自身が部分

的にしかアクセスできないことを自覚する」能力――を育む機会でもあるといえる。事実、バトラーもそれを、バタイユの「非-知」という概念で示している (Butler, 2005=2008, p. 136=248)。

「男」であり「異性愛者」である「私」もこのような作業と決して無縁ではなく、否、むしろそうであるからこそ、このような作業にコミットメントしなければならないだろう。私が男であるなら、それはどんな社会的条件によって可能になるのか、それはどんな「他者」を排除することによって成り立っているのか。私が異性愛者なら、それはどんな社会的条件によって可能になり、どんな「他者」を排除することで成り立っているのか。「アイデンティティを引き受けること」は、自己を批判的に問い直し、その自己が可能になっている社会の規範的構造を問い直す契機を私に与えるものではないだろうか。

アイデンティティを乗り越えるべきか？　私の答えはノーである。そのような思考法は、私が「男」であり、「異性愛者」であり、「日本人」であり、「健常者」であることに伴う「他者」への責任をうやむやにしてしまう。もしアイデンティティが乗り越えられるべきであり、それを引き受けるべきでないのなら、結局ひとは「私」を普遍的な主体として――フェミニズムがまさに問うてきたもの――位置づけることになるだろう。むしろ、私は自己に批判的に向き合い、自分自身を問い直すために、アイデンティティを引き受ける。この引き受けを通してこそ、私はこの社会における自己の「他者」への責任を見出すことができるのであり、自己とそれが可能になる社会の規範的構造を批判的に問い直し、それによって自己を「他者」へと開いていくことができるのではないだろうか。いったいこれ以外のどんな場所から、「私」は「あなた」に語ることができるのだろうか。

注

1　クィアの「主流化」とネオリベラリズムの共犯関係については、清水 (2013) を参照。

2　“Forum: Conference debates. The Antisocial Thesis in Queer Theory” PMLA 121. 3 (May 2006): 819-828. を参照。近年のクィア・ネガティヴィティに関する考察と批判に関しては、井芹 (2013) を参照。

3　私自身は「象徴的なもの」と「社会的なもの」を等価とみなす点には賛同できない。彼の議論は基本的に、ジジェク - ラカン的な、きわめて構造的な理論である。この点で、むしろバトラーがジジェクを批判した議論への参照を促したい (Butler, Laclau, and Žižek, 2000)。

4　エーデルマンは、このような枠組みを「再生産的未来主義 reproductive futurism」と呼んでいる。そ

こでは異性愛家族の「子ども」は「未来」の形象である。この「再生産的未来主義」がエーデルマンにとって問題なのは、それが「政治的な言説にイデオロギカルな限界を課す」(Edelman, 2004, p. 2)からである。それはヘテロ・ノーマティヴィティを「政治の外部」に設定するのである。言い方を変えれば、(形象としての)「子ども Child」は右翼であれ左翼であれ、つねに政治的な前提であり、問われることのない領野とみなされるのである。エーデルマンがクィアネスを「現実界」や「死の欲動」に位置づけるのはそのためである。「死の欲動とまず密接に関係するのは子ども Child の形象である。それは、社会的秩序の未来との同一化を通してアイデンティティを固定化する反復のロジックを制定する。死の欲動と二番目に結びつくのはクィアの形象である。クィアは、その秩序の不可避的な失敗とのトラウマ的出会い〔……〕を身体化する」(Edelman, 2004, p. 25- 26)。

5 バトラーは次のように述べている。「この本を書いていた当時は、ゲイ・アンド・レズビアン研究はまだ影も形もありませんでした。本が出たとき、レズビアン・アンド・レズビアン研究の第二回年次大会がアメリカで開かれましたが、その折にこの本が予想もしなかった方面で取り上げられました。そういえば夕食会で隣に座った男性から、クィアー理論をやっていると自己紹介されたとき、『クィアー理論って何ですか』と尋ねてしまったのですよ。彼はまるで私の気が狂ったのではないかというような顔をしました。私がクィアー理論と呼ばれているものの一翼を担っていると思いこんでいたのですね。けれども当時私が知っていたことと言えば、テレサ・ド・ローレティスが『ディファレンシズ』という雑誌で『クィアー理論』という特集をやったことぐらいでした。『クィアー理論』というのは、彼女が組み合わせた言葉ぐらいにしか考えていなかったのです。私がクィアー理論の一翼を担っているなんて、まったく思いもかけないことでした」(バトラー , 1996, p. 48 -49)。

6 実際、彼女は次のように述べている。「クィアー研究や、ゲイ・アンド・レズビアン研究の理論家である前に、フェミニズムの理論家だと言いたいですね。フェミニズムへの関わりが、たぶん私の一番の関心事なのです。『ジェンダー・トラブル』は、フェミニズムの内部に存在する強制的異性愛を批判したもので、読者としてはフェミニストを想定していたのです」(バトラー , 1996, p. 48)。また、次のようにも述べている。「けれども、ここでさえ、つまり、フェミニズムのなかの権力概念に対立するときでさえ、やはり私はフェミニズムの『中に』おり、フェミニズムの『側に』立っているのです。重要なのは、この逆説を働かせることです」(バトラー , 1996, p. 63)。また、冨山の以下の指摘も付け加えておきたい。「同書〔『ジェンダー・トラブル』〕の登場の前に書かれたベル・フックスの作品を読んだとき、ベル・フックスの『理論的』意義が分からないという疑問が提出されたことがある。そしてこの『理論的』意義により、フックスとバトラーは切断されてしまう。ある作品を『研究史』なるものによって時系列的に整理し、了解した気になってしまう解釈の共同体により、同書が、八〇

年代における第三世界のフェミニストやブラック・フェミニズムによる白人フェミニズムへの批判の中から登場したという事実が見過ごされてしまう。『理論的』という言葉により、フックスはバトラーと切断されたのだ」(冨山 , 2000, p. 105)。

7 『ジェンダー・トラブル』におけるボーヴォワール解釈に関しては、私自身は批判的である。バトラーは『ジェンダー・トラブル』でボーヴォワールの思想をデカルト主義や主意主義とみなしているが、これは誤っているだけでなく、彼女自身の 80 年代の現象学に関する取り組みを裏切るものだ。この点については、Heinämaa (1997) を参照。そこでヘイナマーはボーヴォワールが「女」を「意味づけのプロセス」として現象学的に考察していることを明らかにしている。また、1980 年代のバトラーの現象学理解については、拙論 (2015) を参照。

8 “critically queer” を本稿では「批判的にクィアする」と訳す。つまり、ここでの “queer” を「動詞」として読みたい。バトラーが “critical” という形容詞を使わなかったのはそのためのように思われるし、引用箇所からもバトラーがクィアを「運動」として把握していることが分かるだろう。また、冨山はバトラーの議論に「動詞」の重要性を強調している。冨山 (2000) を参照。

9 冨山は以下のように述べている。「『わたしたち』を失う絶望には、政治において『わたしたち』を維持することの困難さが前提にされているのである。いいかえれば、『わたしたち』を維持することにより何を押し殺してきたのかという問いが、そこには存在するということだ。ひとの顔をしたひとではない存在を押し殺すことにより維持されてきた『私たち』を失う絶望は、したがって希望でもある。バトラーにとって『新しい社会運動』の新しさには、この絶望と希望が同居しているのである。この新しさにおいてバトラーは、絶望をすぐさま次の『わたしたち』でもって補填することも、絶望を前にして既存の『わたしたち』の防衛に向かうことも、選択してはいない。『わたしたち』の困難さにとどまりつづけることこそ、バトラーの選択なのである」(冨山 , 2000, p. 95- 96)。

10 これはまた、竹村和子が「アイデンティティの倫理」ないし「〈同一性の中断〉の倫理」と呼んだものと共振するだろう。竹村は次のように述べている。「平等／差異の政治的ジレンマは、公的領域に存在するジレンマというだけでなく、私的領域で――もっとも〈わたし〉に近接している場所で――〈わたし〉が経験するアイデンティティの分節化／脱分節化として実践化されるものである。それは連帯の場――「大切な他者」との対話――愛の関係――のなかで、集合と離散、親密さと困惑・敵意の二律背反を引き受けつつ、自己が自己に対峙するときの倫理的で、詩的で、孤独な自己への問いかけの緊張だと言えるだろう。だから、『アイデンティティの政治』は、自分自身に対してであれ他者に対してであれ、アイデンティティを分節化する、その瞬間、瞬間に、自己のアイデンティティの脱分節化に向き合う――同一性を中断する――その逆説的な『アイデンティティの倫理的実践』の持続的な

強度にかかっているのではないだろうか」(竹村 , 2000, p. 53- 54)。

参考文献

Bersani, Leo, 1995, *Homos*, Harvard University Press.

Butler, Judith, 1990(1999), *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York and London: Routledge Press.（=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの転覆』青土社、2000, 高橋愛訳「『ジェンダー・トラブル』序文（一九九九）」『現代思想』vol. 28- 14, pp. 66-83）

――― , 1993(2011), *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex,"* London and New York: Routledge.

――― , Laclau, Ernesto, and Žižek, Slavoj, 2000, *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, New York and London : Verso Press.（= 2002, 竹村和子・村山敏勝訳『偶発性・ヘゲモニー・普遍性――新しい対抗政治への対話』青土社 .）

――― , 2004, *Undoing Gender*, New York and London: Routledge Press.

――― , 2005, *Giving an Account of Oneself*, New York: Fordham University Press.（= 2008, 佐藤嘉幸・清水知子訳『自分自身を説明すること――倫理的暴力の批判』月曜社 .）

Clifford, James, 2000, "Taking Identity Politics Seriously: the Contradictory, Stony Ground…," in *Without Guarantees: Essays in Honour of Stuart Hall*, eds. Paul Gilroy, Lawrence Grossberg, and Angela MacRobbie, London: Verso Press, pp. 94- 112.

Edelman, Lee, 2004, *No Future: Queer Theory and the Death Drive*, Duke University Press.

Halberstam, Judith, 2005, *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives*, New York and London: New York University Press.

Heinämaa, Sara, 1997, "What is a Woman? Butler and Beauvoir on the Foundations of the Sexual Difference," in *Hypatia*: vol. 12, no. 1, p. 20- 39.

Young, Damon and Weiner, Joshua J., 2011, "Introduction: Queer Bonds" in *GLQ*: vol. 17, no. 2- 3, pp.241.

浅田彰、キース・ヴィンセント , 1998「セクシュアリティとアクティヴィズム」『実践するセクシュアリティ――同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会（アカー）, pp. 119- 144.

井芹真紀子 , 2013「フレキシブルな身体――クィア・ネガティヴィティと強制的な健常的身体性」『論叢クィア』第 6 号 , pp. 37- 57.

伊野真一 , 2005「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子（編）『脱アイデンティティ』勁草書房 , pp. 43-76.

上野千鶴子 , 2005「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子（編）『脱アイデンティティ』勁草書房 , pp. 1-41.

清水晶子 , 2013「「ちゃんと正しい方向にむかってる」――クィア・ポリティックスの現在」三浦玲一・早坂静（編）『ジェンダーと「自由」――理論、リベラリズム、クィア』彩流社 , pp. 314- 331.

竹村和子 , 2000「アイデンティティの倫理――差異と平等の政治的パラドックスのなかで――」『思想』913: pp. 23- 58.

ド・ローレティス、テレサ , 大脇美智子訳「クィア・セオリー――レズビアン／ゲイ・セクシュアリティ」『ユリイカ』第 28 号第 13 巻 , pp. 66- 77.

――― , 1998「クィアの起源：レズビアンとゲイの差異を語ること」風間孝・ヴィンセント、キース・河口和也（編）『実践するセクシュアリティ――同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会 , pp. 66- 78.

冨山一郎 , 2000「困難な私たち―― J・バトラー『ジェンダー・トラブル』」『思想』913: pp. 91- 107.

バトラー、ジュディス , 1996「パフォーマンスとしてのジェンダー」『批評理論』vol. II- 8: pp. 48- 63.

藤高和輝 , 2013「排除・弁証法・増殖――ジュディス・バトラーにおける法の生産性と抵抗戦略」『論叢クィア』vol. 6: pp. 80- 99.

――― , 2015「現象学からフーコーへ―― 1980 年代におけるジュディス・バトラーの身体論の変遷」『年報人間科学』vol. 36: pp. 103- 117.